

SHISEIDO GALLERY

ギャラリートーク

「見ることから始まること—ドキドキとハラハラから何かがうまれる!」

ナビゲーター／青木野枝、堂本右美 日時／2004年5月22日(土) 14:00～16:00

会場／ワード資生堂

司会(朝川) 現在、ギャラリーでは第5次椿会による「椿会展2004」を開催しています。本日は、そのメンバーの中から彫刻家の青木野枝さんと画家の堂本右美さんをお招きしました。いつもは講演者の方にはステージに上がっていただき、皆さんには客席からお話を聞いていただくような形で進めていますが、本日はステージを取り払い、皆さんとの垣根をなくしてみました。もちろん講演者のお話も聞いていただきますが、講演者お二人の希望で、受講者皆さんのご意見もぜひとも聞かせていただきたいと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。

今回は、まず「見る」ことについて考えてみたいと思います。青木さんと堂本さんのお二人はつくり手側で、皆さんはどちらかというと受け手の側かもしれません。皆さんの中には、アーティストや美術の先生、ギャラリーなどにお勤めで美術と関わりの深い方もいらっしゃるし、美術とは全く関係のない方もいらっしゃいます。今日はざくばっらんにいろんな意見を交換していければいいなと思っています。

たぶん皆さんが一番知りたいのは、このお二人の作品について、「どうやって作品をつくっているんだろう?」とか、「何を考えてつくっているんだろう?」とか、「バックグラウンドには何があるんだろう?」といったことだと思います。そういった創作の秘密というか、種明かしのようなものを最初に見ていただこうと準備しました。では、堂本さんから話させていただきます。

(書画カメラ使用:以下C、スライド使用:以下S)



堂本 C) まず、仕事場の写真からお見せします。ここは私のアトリエなんですけれども、昔パチンコ屋さんだった店舗を賃貸で借りていて仕事場にしています。パチンコ屋のいいところは、換気扇がすぐく整っていることと、電圧が高いのでいろんなことがやりやすい。照明もたくさんとれますし、とにかく中がとても広いのです。

司会 あの前面のガラスブロックのところが、とてもいい感じなんですよね。



堂本 C) ちょっとこの写真では見えにくいんですけど、中には立体鏡といって道路なんかによく設置されている立体的に見える鏡が残されていて、パチンコ屋の名残です。自分の作品を見るときに鏡を通して見ると、非常に客観的に見られるということと、距離が倍にして見られるということで、よく使います。それに作品って、逆さまにして見ると間違っているところなんかもわかりやすいので、私は昔からよく鏡を使っています。

司会 高さはどのぐらいあるのですか?

堂本 天井は3メートル40センチあります。天井だけ自分で抜いて高くしました。



C) これはアトリエの内部です。私の作品は、日常の中で日々思うことを題材にしています。現在子供が二人いて、主婦兼母親兼作家兼娘兼……、いろんなエレメントを持ってやっているのですが、そういう忙しい生活の中でフッと気がついたこととか、

記事を読んだりして感動したこととか、気に入った写真とか、そういったものを時間がないのでとりあえず切り取ってダンボールの箱の中に資料として入れていっているんです。

司会 右側の下の方に見える段ボールがそうですか？

堂本 一番右の箱がとりあえず投げ込む箱で、真ん中が自分にとって今大事というか関連性のあるものの箱で、一番左は要らないものです。ずっと5年ぐらい眠っている記事とかもあるのですが、時間があるときに分けています。その中から、自分のやりたいことを引っぱり出して、これが私の日記みたいなものなんですけれども、このスケッチブックの中で自分で編集をしていたり、言葉遊びみたいにしてウェビングをよくやるのです。自分のテーマを一つ決めたときに、言葉をクモの巣みたいにつなげていくことで、新しい接点を見つけたりするような遊びをしながら、ふだんの生活の中での実感を表現にしていきたいなと思って努力をしています。それが私の仕事の準備の工程です。

司会 この黒いスケッチブックに堂本さんの秘密がぎっしり詰まっているんですね。

堂本 そう、私のすべてが。だから絵を描き始めるまでの時間がすごく長くて、この作業に大半を費やしています。そして大体イメージがわいてくると、一気にガーッと描いていくというのが、私のパターンです。

青木 奥の方に見えるのは、レコードなんですか？

堂本 そうです。

青木 CDじゃなくて、レコードを聞くんですか？

堂本 はい。いろんなジャンルを聞きます。数えたことないけど、昔ニューヨークに住んでいた頃、1枚100円ぐらいの中古のレコード屋さんがいっぱいあったのでよく買っていたんです。

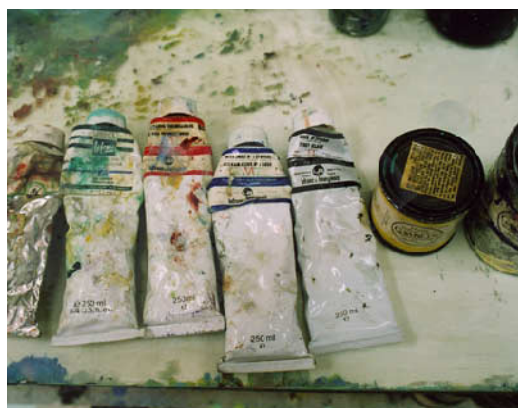
私の場合、家事とか育児とかから気持ちを切り替えるのがすごく大変なのです。アトリエに入った瞬間に別人というか、今までの自分から離れて作家に戻るというか、切りかえの効果としていろんな音楽をかけたりするんです。まず、コーヒーを飲みながら新聞を読んでだんだん気持ちを切り替えていく。箱の中を見たり、ノートを見たりしながら温めていって、そして制作に入っていくというのが、毎日のパターンなんです。

昔はクロッキーとかドローイングをたくさんしながらイメージを膨らませていったのですが、最近は文字とか書物とかがいきなりイメージに変わっていくことの方が多いように思います。

司会 ちょっと話を中断するかもしれませんが、今回の作品タイトルの『かなし』というのは古語ですよ。その言葉の響きとか、意味とか、今までとちょっと違うものを感じたのですけれども。例えば、文字とか書物とかがイメージに変わっていくということを今おっしゃいましたが、古語が前面に出てきたというのが、ちょっと意外だったんですが。

堂本 別に古語に詳しいとかそういうことではなくて、中学ぐらいのときの古典の授業で万葉集の勉強をしているときに、「かなし」という言葉は今の言語で言う「かなしい」ではなくて「いとしい」という意味が含まれていて、それはやはり美しいものとか感動したものを前にしたときに、それが壊れていってしまうのはかないものだとということを含めて「かなし」なんです。そういう両方の意味合いが含まれているというようなことを覚えていたので、私の今の心情にすごく合った言葉だと思って、たまたま使っただけなんです。

司会 そうでしたか。よくわかりました。では、次の写真です。



堂本 C) これは私のパレットです。自分で作りました。上の面が全部ガラスになっていて、そこで直に絵の具を混ぜたりします。いっぱい絵の具とか置いてあるんですけども、実際に自分が使っているのは7色だけでした。過去5年間、この色だけしか使っていないことがわかったんです。

司会 筆も見てください。結構いろんな大きさの筆を使われるんですね。



堂本 C) はい、刷毛をよく使います。左側の方にあるのが刷毛です。これは20年ぐらい使っている筆です。だんだんはげてきて、丸くなってくるととても使いやすいですね。

司会 堂本さんの絵の中に出てくる黒いラインの幅は、刷毛の大きさに決まってくるということですか？

堂本 いえ、あれは一筆で描いたように見せていますが、違います。何度も何度も重ねて描いています。

司会 本当はこのスケッチブックの中をお見せしたいのですが、これは門外不出ということですのであきらめましょう。
堂本 恥ずかしいので、やめてください(笑)。こういうことは、皆さんもやっていらっしゃると思います。記事を貼ったり、メモがいっぱいあったり。

C) これは新聞を切り取ったもので、バグダッドの記事です。祈りの形を手であらわす宗教の写真なんです、ずっと弾圧されていて、フセインが捕まったことによってやっと表立って祈れるようになったという内容で、この写真を見たときに「手の形が本当に美しいな」と思って。

司会 去年の椿会展で、手をモチーフにした堂本さんの作品を覚えていらっしゃる方もあるかもしれませんね。

堂本 あのときは小品を描くということで、9点の組作品を描いたんです。9枚のキャンバスに1つずつ、手の祈りの形を描きました。私の絵というのはまず背景があって、その上に黒い線で描いた形を重ねることで二重構造を持つような形態をとるのです。昨年の作品は、1点ずつでも成り立つ絵だったのですが、9点を組み合わせて見ると大きな頭蓋骨の形が見えてくるような仕掛けがしてあって、一つ一つの作品と集合したものが全然違うメッセージを持つという形態を何とか表現してみたいなと思ってつくりました。

こういった何でもない日々感じたことが作品になっていくという例としていくつかお見せしました。

司会 質問のある方は、途中ででもいいのでどんどん手を挙げてください。それでは、次に青木さんにお話しいただきます。



青木 S) これは埼玉県飯能市にある私のアトリエです。上の方の青い屋根のところで、鶏小屋を改造して使っています。手前は成木川です。鶏小屋って、匂いとかのこともあるので、壁がなくて網になっています。今は一応ビニールが取り付けられてありますが、冬もこのままです。屋根はブリキで、夏は40何度ぐらいになってしまうし、冬はバケツの水が凍るぐらい寒いという感じのアトリエです。

S) これはバーナーで鉄を熱しているところです。わかりにくい写真ですみません。上のギザギザが鉄の板を切ったところです。

S) この頃はリングの作品が多いので、リングの中身がドーナツの中身みたいにいっぱい余ってしまって、それがこうやって積んであります。「何かに使えないかな？」って思っているところです。

S) 左が19ミリの厚さで、右が12ミリの厚さです。私がつくっている鉄の作品は、大体こんな厚さのものを使っています。鉄が必要なときは、鋼材屋さんに「1.5メートル×3メートルぐらいの大きさの5×10版(ごとうばん)、12ミリを10枚ください」とか電話で注文して、ユニック車で買いに行くんです。

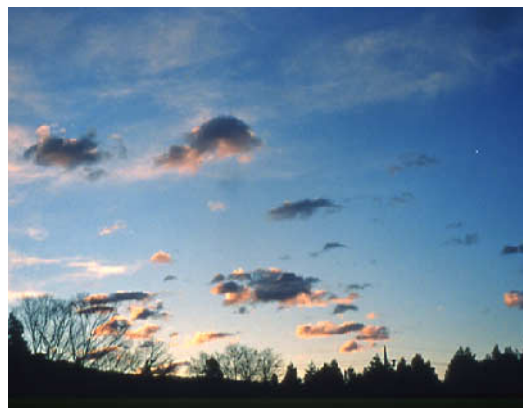
堂本 自分で買いに行くんですか？

青木 買いに行くときは、男の子1人か2人連れて行きます。というのは、私のアトリエは、天井クレーンとか吊る設備が何もなく、運ぶのが大変なんです。ユニック車はトラックに吊る機械がついているので、鉄板を吊ってトラックから降ろしたら、台車のようなもので奥に引っ張って運べるんです。なんとって1枚が500キロぐらいあるので、自分の手ではどうしようもないですよ。溶断して小さく切って作品にしていいたら、アトリエから出せるんだけど、それまではもう動かしようがないので、ただただひたすら切るという作業をしています。



S) これがアトリエの中です。鉄というのは、溶断といって酸素とアセチレンのガスで切って、電気のアーク溶接機というのでくっ付ける。ほかにもグラインダーで切って、エッジを立てるとか、磨くとかそういう作業があるんですが、それは嫌いなので私はやりません。後ろに立っているのが酸素ボンベで、もうちょっと小さいオレンジ色のボンベがアセチレンです。

だれにでもできるということが、私にとってはすごく重要なんです。技術がある人とか知識がある人しかできないのではなくて、後でお見せしますが、小学生でもできる。猿にでもできる。そういうようなモットーを持って作品をつくっています。



S) これから見せるスライドは、アトリエから帰るときに車の中からパチパチ撮ったスライドです。こういうふうな雲が見えたりして。

S) 向うの方にでべそみたいなものが見えますが、あれは御岳山。ちょうど東京都と山梨県の境なんです。ずっと左の方に富士山があります。

堂本 私も、これと同じような風景を見て一日が終わるんですよ。この感動がすばらしいですよ。本当にきれいな。バーッと夕焼けが見えて、それで電線があって。

青木 あ、そうそう、電線って結構きれいだよね。



堂本 きれいですよね。

青木 自分のアトリエの空気の重さというのは本当に心地よくて、でも、だからといってアトリエでずっと仕事しているかというところでもなくて、私の場合は、すぐおやつ食べたりして、手伝いに来た人が「またですか？」と言うんですけどね。

私のアトリエでもCDかラジオで音楽を聞いています。あとは川のせせらぎがすごい聞こえていて、屋根がトタンなので雨の日なんかは雨の降り始めの音が聞けるんです。最初に降ってきた「タタンッ」というところから聞こえて、「あ、雨だな？」とわかるんです。「ザーッ」と降り出すと、電話の音も聞こえないぐらいになります。昔は雨漏りもすごくて、部屋の中なのに雨が降っていたこともよくありました。でも、それはそれで自分ではすごくいいアトリエだなと思うんですけどね。蛇もいるし、とにかくいろんなものがいます。



S) この写真の場所は、昼間は門ががっちり閉まっていて、夜になると門が開いて中が見えるんです。そしてすごい匂いがする。これ、肉なんです。上からブワッと肉が落ちてくるの。肥料が何かを作っているところで、私たちが食べた肉の残りとか屠殺した肉の売れない部分じゃないかと思うんだけど。なんだか「ここ、見ていいですか？」というような雰囲気じゃないんです。ちょっと怖い感じのおじさんがうろうろしていて、「余り見てほしく

ない……」というのがすごく伝わってきて。だから、コソコソッと見て、コソコソッと去っていくみたいに、車でこの前を二度往復してシャッターチャンスを待って、車の中からカシャッと撮ったものです。このお肉の色、本当にきれいなピンク色なんです。朝はカラスがカアカアカアカアすごい山盛りになっているんですが、とにかくきれいなんでお見せしました。

S) 次の話にうつります。私の作品は、ガスで切って電気をつける。もうそれだけ。例えば四角をつくる時とかも、メジャーもそんなに使わない。自分にとって真っすぐだったらいいわけですよ。チョークみたいなもので鉄板にピーッと線を引いて、私が真っすぐだと言えばそれでいいわけです、私の作品だから。丸にしても、コンパスは使わないで自分でクルンッと丸を描いて、「これでいい」と言えば、他の人が異論を挟めないわけですよ。「それ、丸じゃないよ」と誰かが言っても、「いいのよ、私はこれで」と。そういうことが言えるのが彫刻のいいところかなと思っているのですけれども。

ここ何年かワークショップをやるチャンスがあって、私は人見知りで初めはちょっと躊躇してたんだけど、やってみると自分よりいいものをつくる人が世の中にはいっぱいいるんだということが本当によくわかって、やってよかったと思っています。こっちがもうガンとくるぐらい、いいものをつくったりする人が結構いるんですよ。



S) これは、青森の小学生が溶断しているところです。熱いんですよ、鉄を切るときって。それで、子供たちの何人かを消防隊員にして、熱くなった鉄板に水をかけて冷やしたりしたんです。目玉焼きだってすぐできちゃうくらい熱くて、1,000度くらいあって水蒸気でもやけどしちゃうんです。でも、熱いんだということが実感できて楽しいです。水に入れるときジュウッというし、たらいが溶けちゃうこともあるんです。

S) あるとき、小学校1年の男の子が、初めは後ろから抱っこするみたいに手を添えてあげて一緒にシューッと切っていたのが、そのうちに「触るな！」と言いだして、こっちが「エッ？」と驚いたら、「おれが一人で作る！」と言って、さらに「エ、エッ？」とびっくりしたことがありました。そんなこと中学生にも言われたことなかったのに、「小学校1年でできるのかな？」と不安に思っていたら、その子は本当に上手で、溶けすぎて火花がパンッパンッ出るときがあるんだけど、その子は教えてもないのに手元をちょっと引いて加減したりしていたの。そういうことが天性

でできる子もいたりするってことがわかって、もう全く私の不覚というか、そういう感じでした。

S) この子はこのとき小学校2年か3年でしたが、家をつくったんです。しかもここがケーブルカーになっていて動くんですよ、パーッとね。家がケーブルカーになっていて上へいったり下へいったりできるようになっているんです。説明がこれまたおもしろくて、左下のところに三角があったり丸いのがあったりするんだけど、この三角は鯨のヒレで、ここは海で、鯨がいるんだと。こっちの丸いのは何とか言うと、これは山だと。ちょっとした形の差が、彼にとってはとっても重要なことで、話を聞くのもすごいおもしろかったですね。



S) ワークショップをやって、ついでに私の作品も展示するというので、ギャラリー21+葉というところで個展をしたときの作品を持っていったんです。個展のときは自分でパーツを積んだんですが、ここでは子供たちに積んでもらうことにして、「どこに、どれ積む？」とか話し合いながらいっしょに展示していきました。この子は、「ちょっと疲れたからお休みするの」という感じで作品の中に入って休んでいるところです。

S) 完成図がこの写真なんです。個展で積んだものとは全然違って、私は「こっちの方が何かいいなあ」と思ったりしてるんですよ。作家によっては、「作品は絶対自分でつくりたい」という人がいて、もちろん私もそんな場合もある。けれども、この作品はこのパーツがどこにいったとしても、自分としては大差ないかなと思っているんですよ。嫌いな人には絶対に積んでほしくないんだけど(笑)。この場合は、「すごいよかったな」と思えた作品です。堂本 つっこんでいいですか？「よかったなと思う」のはどうして

なのかな？

青木 自分でつくっていくと、最初に自分が描いたドローイングとかにどうしてもしばられちゃったりするでしょ。ワークショップのときは、自分以外の人の発見というのがおもしろいんです。例えば、この四角は本当はこっちが上なのに、逆に積まれてたりしてね。

堂本 私なんかも描いているときは、自分のアイディアがあってそれで描いていくでしょう。そうすると、ときどきそうじゃないものができてくる。自分が関わっていても、予想以外のものが出てきたときの感動に似ているのかな？

青木 そうそう、自分がびっくりしたいわけですよね、自分がつくっているときって。

堂本 それがないと作品にならないもの。

青木 それも、他人が全部やったからって、そんな感動は絶対ないんですけど。私がいつも作品をつくっていると思うのは、自分の精いっぱい努力というか、ぎりぎりまで自分がやって「もう悔いがない」と思った段階まで行けば、そこから先は、「どうやってもらってもかまわない」というような気持ちがあるんだよね。私は一か八かというような感じが好きで、そもそも作品はパーツでしかないんですよね、自分のアトリエにあるときは。

堂本 ドローイングはないの？

青木 ドローイングはあるけれども、そんなにちゃんとしたドローイングじゃないのね。今、ギャラリー21+葉で展示している作品もそうなんだけれども、自分の頭の中ではもう少し違うものだったんですが、でもそのときに「ドローイングというか完成図に近づけようと思わない方がいいな」と思っていて、実際つくってみて、「あれ、こんな感じなんだ！」って、自分でも驚いたんです。私自身は、もっと怖い感じのものができると思ったわけよ。でも、できあがったら全然怖くなくて。私は、世の中とか世界に対して楽観的じゃなくて、明るくていいものだけを見ているようなタイプじゃないと思うんだけど、できた作品は、なんだかランランッという軽い感じになってしまっていて。

堂本 それは性格(笑)。

会場 そうやって展示するときに、気に食わない置き方をされたことはないんですか？

青木 余りないですね。そのとき気に食わなくても、それはそれでいいんじゃないかな。そのパーツつくったのは私だし、置き方ぐらいではそんなにならないと思うんですよ。もしそのとき気に食わなくても、後で気に食っちゃうかもしれないし。後になって、「この子は どうして こういうふう に置いたのかな？」って思うことが楽しいんですよね。だから、どっちかというとなんか気には食わない置き方をされた方が、案外おもしろいのかもかもしれません。司会 お二方にはそれぞれの創作の種明かしをしていただきました。やはりこのお二人はつくり手としてものを見ているんだと思うんですが。

青木 つくり手として見ているというのはちょっと違って、それはみんな同じだと思うわけです。例えば、堂本さんが「娘であって、母親であって、妻であって」と言われましたが、つくり手として見るということではなくて、まずは自分として見るということだと思うんですよ。

司会 青木さんのお話の中で、「見ることって大事よね」というのがよく出てくるのですけれども、青木さんにとって見ることって何ですか？

青木 皆さんにアンケートに答えていただいて、「自分だったら

どういふに答えるのかな？」と思いながら読ませていただきました。そういうことが私は一番大事だと思うんですね。「この人はこういうふうになるのか、ふーん」じゃなくて、「自分だったらどうするのか？」あるいは「自分が他人だったらどうするのか？」っていうことを考えるからおもしろいんです。最後の質問に「どんな体験を期待して展覧会に行きますか？」ってありますが、私も期待はしないんですけども、でもやはり自分が変わる。自分が見たことによって絶対自分が変わっていると思うんです。



堂本 「見る」と「変わる」というのは、もしかしたら「わかっている」と「知る」ことの違いじゃないかしら。わかっているつもりでいても、やっぱり実際に自分でそれを本当に知ってしまうと、その瞬間変わるじゃないですか、人は。例えば書物で読んだりとかして理解していることは、自分に影響はないのよ。でも、実体験であるとか、自分の身に降りかかったりとかして本当に体験して「知る」と、それまでの自分と「変わる」という瞬間があって、その違いだと思うんです。

青木 でも、それは頭の中ではわからないことでしょうか？ そのときに変わったかどうかわかる？

堂本 ええ、全然違う自分になる。

青木 それはきれいなものに対してでしょうか？ そうではなくて、嫌なものとか怖いものとかはどう？ つまり「見る」ことは「知る」ことだということ？

堂本 うん。私はそれが本当の知ることだと思うんだけど。

青木 ああ、なるほどね。そう考えたことはなかったけど、見るということによって変わっていくというのは、絶対にある。だけど、それがその瞬間じゃなくて、沈殿していく何かがあって、ホワホワホワッと浮き上がる何かがあって、それが何だろうかって自分でもよくわからないんだけど、3年ぐらい後になってジワッと出てくるのかなって思います。

堂本 にじみ出てくる感じ？

青木 そう。自分が彫刻をつくるためには、自分の人生というか自分の生き方として、「これだけは絶対やっちゃいけない」と思っていることがあって、それをやっちゃうと彫刻がつかなくなるだろうなって。うまく言えないんだけど、彫刻とかやっているということが、自分にとって宗教のような気がするんです。だから、つくってられるんじゃないかなというふう思うんです。

突然、美術の話に戻りますけれども、絵とか彫刻にしても、いい作品というのは、今と違うところに連れていってくれる気がするんですね。

堂本 つくる人？ 見る人？

青木 見る人。例えば、自分のつくる作品は自分と同じ床の上に

あって、それを一番最初に見る人が私なわけですよ。というのは、私の作品は大体が画廊とか美術館の中で溶接してパーツとつくりあげていくので、できあがったものを私自身が一番最初に見る人になるんです。そのときに「あ、こういうものだったのか！」って、自分がどっかにちょっとだけ動くような感じがあって、そこがちょっとでも動かないと次がつかれないと思う。自分は次につくるためにつくっているかなというふう思うんですけど。

堂本 私は、次はないです。次へのつながりはないけれども、自分のこだわりとかつくりたい意志のもとにつくるでしょう。でも、それで終わってしまうと、もう描く前に完成しているものだから、つくっていておもしろくないんですよ。

青木 うんうん、それは本当にそうだと思う。

堂本 もちろん自分の問いかけでつくっていくんだけど、ある瞬間に向うから問いかけ直してくるときがある。向こうの方が主体になってきたときに。

青木 絵が？

堂本 うん。私が逆に質問されるような、その瞬間に「できた！」と思うんですよ。それは私自身の感動であって、そういうものが自分で感じられると、きっとほかの人も見たときに同じ感覚を味わえるかもしれないという期待はある。

青木 私たち、同じことを言っていると思う。

堂本 だから、自分のやりたいことをやり遂げただけでは、私が感動しないんだから、誰も感動しない。

青木 完成図があるものをやっても、それはもうわかっていることで、結局やらなくてもいいわけよね。

堂本 でも、そのときは必死ですから、次のことは考えられないけどね。



青木 次というのはつくり続けるというか、自転車をこぐのと同じで、生きていく上でそれだけはやっていないと前に進めないし、倒れちゃう。そういう感じのもので、生きていく上で自分をどこかにちょっとでも動かしていけないとだめなんです。

堂本 前は、一日中朝から夜までアトリエにいて、フッとやる気になったときに仕事ができただけけれども、今は違うんですよ。私の場合は本当に時間がなくて、圧倒的な集中力で勝負しているわけ。それは私にとってすごく新しいことで、いいものなんですよ。

青木 自転車でアトリエまで5分ぐらいでしょ？ 自転車で家を出るあたりから変わってくるの？

堂本 いえ。具体的に言うと、仕事から帰ってきて、ご飯を食べさせなければいけない。だからその仕込みをするあたりから切りかわっていくんですよ。仕事のことを考えながら、ご飯をつくっていて、家を出た瞬間には変わってきていて、アトリエに着いた

ときには描ける雰囲気にしておかないと、そこから座ってさあ描こうというふうののんびりやっていると……。

青木 時間が足りない。

堂本 そう、すぐ帰る時間になっちゃうの。そのかわり集中力はつきましたね。

青木 私はだめかなあ。今はアトリエから15分ぐらいのところのアパートに引っ越してそこから通っているんだけど、アトリエに着いてドア開けると、「あっ、私こんなのつくってた？」っていつも思うわけ。作品のこと全然忘れちゃってるんですよ、何をやっているかということすら。そこが私の壁、深刻さが足りないというか……。

堂本 それ、最高じゃない。

青木 あ、そうなの？

堂本 毎日そうやって新しい目で作品を見るなんて。

青木 それにしても仕込みするときから入っているというのは、何かいいですね。

司会 ふだん聞けないような制作の裏話も楽しいのですが、ちょっと「見る」ことについて話を戻します。今回、皆さんにアンケートをお願いしました。「何だ、これ？」という質問もあったかと思うのですが、皆さん本当にきちんと答えてくださって、結構「見る」ことを日常から意識してやっていらっしゃるのかなと感じました。ほとんどの方が、足の裏をじっと見たことがあるとお答えになっていました。私も見ているといえは見ているんですが、でも「どの指が一番長いかな？」と問われると、即答できないんですよ。その程度にしか見ていないんですね。では、次にいきます。

(青木作品のかけらを会場に1個ずつ配布)

司会 今皆さんにお配りしているのは、青木さんの作品のかけら、鉄の小さな塊です。どうぞ手にとって見てください。いろんな大きさがあって、どんなのを選ばれるかというのでも、何となく性格が見えてきちゃったりするんです。

青木 厚さが2種類あって、19ミリの厚いのがいくつか混ざってます。

司会 ふだん彫刻というと、あまり触ったりすることは少ないと思うんですね。これは、今ギャラリーに展示してある青木さんの作品に使われているものと同じものなんですよ。

青木 堂本さんが手に持っているのが、丸を切り抜いた後の残骸



です。こっちの方もいい感じなんで持ってきてみました。丸の方は作品になるんだけど、こっちは作品にはならない。でも、結構こっちの方がおもしろかったりする……という感じなんです。

司会 「見ているだけじゃわからない。じゃあ触ってみようか？」ということで、今日は皆さんに直に触っていただくことにしたんです。

青木 感想を聞いてみたいのですが、どうですか？ よく子供に、「鉄ってなあに？」って聞くと、みんな答えられないんですよ。今じゃ鉄棒もFRP(Fiber Reinforced Plasticsの略)だったり、フライパンも鉄じゃなかったりするし。磁石を持って町に出て『鉄をさがそう！』というワークショップをやったことがあるんですけど、そんなことをすると、どんなものが鉄なのかって結構わかるんですが。鉄を手にした感想、どんなのもでもいいからちょっと聞いてみたいなと思っています。どうですか？

堂本 意外に重たいので、びっくりしました。

青木 やっぱ重いですね。

堂本 これをつけるのは、熱だけでつけているんですか。

青木 溶棒という接着剤のような棒状のものを溶かしながら、鉄と溶け合わせてくっつけていくんですよ。

会場A 私は、鉄を溶接とか溶断とかするとき、融点に達して真っ赤できれいな色になるじゃないですか。それが好きなんですけど、野枝さんも好きですか？

青木 好きですね。ほんとに溶けた鉄の方が好きくらいなんです。鉄って、溶断しているとドンドンドンドンタ日みたいになくなっていて、そのうちに白く輝いてきて、そこで溶け出すんです。それが冷えていくときには周りから冷えていくわけです。そうすると、内側だけ温度が高くて半透明に見えるときがあって、そのときがほんとうにきれいなんです。そういったつくる作業がすごくきれいで、大好きなんです。

以前、生卵を作品に使ったことがあるんですけども、それと同じような理由で、卵もこうやってかざすと、中がちょっと半透明のオレンジ色に見えたりして、その卵の殻の中にも一つの世界があるなって感じて、卵を使いたいと思ったんです。

会場B これは色がとってもきれいですけど、バーナーの温度を変えたりして色を出しているんですか？

青木 そんなことはしていないんですよ。よく「この断面の色きれいですよね」と言われるんですが、1年ぐらいすればこれも錆びてくるんですよ。すごい高温で切っているの、鉄が焼きをいれたみたいになっていて1年や2年は錆びずにもつのですけれども、やはりだんだんと錆の色になっていきます。ただこれは、コールテン鋼といって耐候性鋼なので、一通り錆たところで酸化がとまるというようなちょっと高い鉄なんです。普通の倍ぐらいするんです。

会場C 僕は、久々に素材感というのをすごい感じました。ところで、青木さんは鉄を舐めたことがありますか？

青木 あります。

会場C やっぱ味というのは、それぞれによって全部違うものですか？

青木 たまにしか舐めないで、そんなに詳しくはないですが……(笑)。前にどこかで鉄の話をしたら、お医者さんがいらして、赤いというのは血の色で、成分は鉄と同じですよと言われたんです。ほら、口の中切るとちょっと鉄っぽい味がしますよね。

会場C これは今回もらえるんですか？

青木 差し上げますよ。でも持って帰るのが重くてつらい人は

置いていってください。

司会 では、堂本さんへの質問とかありますか？

会場D 使っているのは7色だそうですが、何色ですか？

堂本 原色ですね。白、黒、青、オレンジ、緑、黄色。赤がないんですよ。あ、それから紫です。

会場D じゃ、あの黒は、真っ黒なんですか？

堂本 あれはアイボリーブラックです。

会場D 混色じゃないんですか？

堂本 はい。

青木 ちょっと聞いていいですか？ 色のことは余りわからないんですけども、混ぜると濁ってしまうとかよく言いますが、そういうことってあるんですか？

堂本 例えば、白を混ぜると発色が悪くなるので、私の場合は白を混ぜることはしないですね。特に今回の絵には光のような色が出ていたけれど、それはあくまでもキャンパスの地の白を使って描いているのです。白を混ぜてつくと、やはり異質のものになるんですよ。

青木 キャンパスの白を利用するというのは、白いところというんじゃないくて、その白とプラス緑とかいうことですか？

堂本 そうです。明暗はキャンパスの白を使っています。白を混ぜてつくるエメラルドグリーンのような色というのは、全然違う感触になると思いますよ。やっぱり濁ったというか、もっと物質的な色になっちゃう。

会場E 堂本さんは、ニューヨークに絵の勉強に行かれたそうですが、あちらには素晴らしい絵がたくさんあると思うのですが、いつも見に行っていたお気に入りの1点というのがあれば教えてください。

堂本 MoMAにはよく行きました。私はとてもマチスが好きだったの。『ピアノのレッスン』とか、踊る人たちが輪になった絵とかありますけど、とにかくしょっちゅう見に行っていました。さっきの色のことを言いましたが、彼も絶対に白を混ぜなかったんじゃないかなと思います。

司会 では、今日は頭の体操とかちょっと実験をしてみたいと思います。紙と鉛筆がお手元に回ったと思います。それでは、日常私たちがよく見ているもので、誰もが目にしたことがあるものを描いてもらおうと思います。

堂本 では、柴犬を描いてみてください。できれば全体像を。柴犬が描けなかったら、何か自分の気に入っている種類の犬でもいいですよ。なるべく詳しく、足の先ちょっとかまで描いてみてください。うちではよく子供たちと一緒に、「キリン描ける？」とか言っってこういうゲームをするんですよ。私は「本当に描けないもんだなあ」といつもびっくりしちゃうんだけど。

司会 結構見ているようで、見てなかったりする。今日は「見る」ことのきっかけみたいなところを探ろうとしているんですけども、「あなたが見ていたものは本当にそうなの？」みたいなところも確認しながら。トークを聞きに来て「こんなことをさせられるとは……」と思っていらっしゃるかもしれませんが、頭の中をちょっとだけ柔らかくしてみてください。描き終わられたら、今度はみんなで鑑賞し合いたいです。右回りにどんどん回していってください。楽しい絵がたくさんできあがっているようですね。今、柴犬の写真も回覧していただいています、目は小さい三角、しっぽはくるくると巻いていて、耳はぴんと立っている。でも、皆さんが描いた方が結構いける犬だったりするかもしれないですね。



堂本 すごい皆さんよく見ていらっしゃるというのがわかります。

司会 思いのほか立派な犬がたくさんいますね。ちょっとびっくりしました。

堂本 本当なら、ここで「意外と見てないもんだね」という話をするのはずだったのにね。

司会 「皆さん、意外と見ているね」という話になりました(笑)。

堂本 例えば私、今の中で2〜3点すごい好きな絵があるのね。好き、嫌いってあるよね。だから、きっとほかの人もみんな、「この絵が好き!」というのあるんじゃないかしら？

私なんかは上手に描けているというよりも、やっぱり犬らしいというか、そこにほんとにいるみたいない感じの犬に惹かれました。

青木 あるいは全然犬らしくないとかね。

堂本 例えば、昔飼っていた犬を描いた方がいらしたでしょう？

青木 そういうのは全然違うよね、やっぱり。抱っこしている犬を描いたり、餌場があったりとか、きっと、その人にとっての柴犬というのはそういうものなのでしょう。ぜひ皆さんの感想を聞いてみたいです。

会場F 絵心がある人となない人によって随分違うと思うんですよ。僕なんか絵は描けない。自分にとって柴犬の特徴を考えると、まずしっぽだったのね。だから、本当は全身じゃなくてしっぽの部分と、あとは耳がピンと立っているというのはわかるから、その耳の立っている部分を部分的にアップで描いて、それからもう一つはしっぽの部分をアップでボンと描こうかなと思ったんだけど……。だから、絵心のある、なしによって随分違うんじゃないかと思います。

青木 「見る」ということは観察力じゃないと思います。自分にとって柴犬は耳だけだと、あるいはしっぽだけだと思っていもいいんです。私も今描いてみて、余り上手くかけなくてよくないなと思うのは、自分にとっての柴犬がなんだか中途半端だからなんです。「柴犬といたら耳だよ!」と言った方が、絵としては絶対いいと思うんですよ。見ていて「いいな」と思う絵が、けっして上手い絵ではないわけでしょう？

堂本 じゃ、その「いい絵」って何？

青木 私に聞かれても……(笑)。

堂本 大学のときに出された課題で忘れられないんだけど、「自分が思ういい絵と悪い絵をそれぞれつくって、1ヵ月後に持ってきてください」というのがありました。

青木 悪い絵も描くの？

堂本 これはいまだに答えがでないし、問題なんです。その講評のときにももちろん答えはなかったですね。みんなそれぞれが自分の答えを持ってきたの。私の答えは、いい絵というのは人に見せたくなくて自分の仕事場にこっそりずっと置いておきたい

ような絵。悪い絵というのは両親の寝室にかかっている自分の絵というふうなものでした。ほんとうにいろんな答えが出てきたんだけど、そのときに「じゃ、良い悪いってどこで決めるの?」ということで盛り上がったのを覚えています。皆さんはどう思いますか?

会場G 私が思っているいい絵とか悪い絵というのは、最初から「いい絵とはこういう絵だ」というのがあるんじゃないくて、ある絵を見た瞬間に「この絵はいい絵だ」とか「この絵は嫌な絵だ」とかいうのが、初めて自分の中で決まるんであって、あらかじめ答えのあるものじゃないというふうに思います。

青木 自分が「これはいい絵だな」と思っている、時間がたったり状況が違ってくると、「この絵よりもこっちの方がいい絵だ」と変わってきたりするよね。さっきの右美さんの課題の話に戻りますが、いい絵というのは自分でつくれると思うの。でも、自分で悪い絵をつくるのは物すごく難しいと思う。やっぱり、絶対に描きたくないし、拒否したいという部分はあるでしょう?

堂本 でも楽しかったですよ。何か風景画みたいなのを描いちゃって(笑)。いつもいいものを追い求めているわけだから、逆におもしろい経験だったけれども。

青木 私にとってのいい絵というのは、普賢菩薩とか早来迎といった平安から鎌倉時代の絵なんです。世の中にはすごい嫌なこともいっぱいあるんだけど、この絵を描いた人が人間で、この人間が自然がつくったぐらいきれいなもの、例えば夕日ぐらい美しい、空ぐらい美しい絵というものをつくれるということは、私にとってほんとうに救いなんですよね。「その絵を描いた人と同じ人間でよかった」と心から思えるのね。

たまに人と話していると、「どうして野枝さんはつくっているんですか? 何か焦るものがあるんですか?」と聞かれることがあるんです。昔から俗世間的に「ハングリーじゃないと絵は描けない」とか言われているからかもしれないんですが、でもそれってその人にとってのハングリーだから、「何でこの人がつくっているのか?」ということが客観的にみんなに見えやしくないと、やはり納得してくれないのかなということを実感して。

堂本 その人は、満たされないものがあるから、それを補うために芸術していると思っているんでしょうね。

青木 でも、それは違うと思う。どんなに満たされていようがつくらざるを得ないというか、つくらないと私の人生は回っていかないというか……。

堂本 私は、やっぱりつくるのがすごく楽しいんですよ。幸せなの、つくってると。それだけじゃだめなのかな? 私も同じことよく聞かれるんですよ。私なんか端から見ると何でもあるみたいに見えるらしいのだけれども、「何でそういう人が芸術続けるの?」って言われて、困ってしまう。そうじゃなくて、純粋につくることが私にとってとても幸せなんですけれども。それじゃだめなのかな?

司会 お二人の心の声というか、制作に対する正直なお気持ちだと思います。そういうことが作品となって、そして展覧会という場で発表されるわけです。今まさにギャラリーでは展覧会をやっているわけですが、では、それを受け取る側の皆さんには、「何を期待して展覧会に来ているの?」「何を見に来ているの?」「何が見たいの?」という質問を投げかけてみたいと思います。皆さんにマイクを回します。

会場H 特に期待というのはないんですけども、展覧会に行ったら作品を見て、自分が知識を得たりして、何か変わるんじゃないかなと思って。

会場I 単純ですけども、出会いというのがまず一つと、それ

から出会いによって当然感動があるだろうというのが理由です。

会場J やはり本物を見ないとわからないものってあるじゃないですか。雑誌とか本とかで見たら感動しなかったけれども、本物を見ると感動したということもよくあって、その興奮とか感動を味わいたくて見に行くんです。

会場K 私は、「この人はこういうふうにいるんだ」とか「この人はこれをこういうふうに見てるんだ」とか、そういうことに興味があるので、それを感じたくて展覧会に行っているように思います。

会場L 私は刺激を求めて、割と期待をして展覧会を見に行きます。私の好きなものとかだったら「悔しい!」と思う。先にやられたなとか思うと、行ってよかったなと思う。

堂本 あなたも何かやっていらっしゃるの?

会場L 絵を描いています。中学のときに見に行ったものがトロンプ・ルイユ、だまし絵だったんですけど、なんだか「やられた!」と思ったことがあって、その後、私もそれをやりたくて描いているんです。

会場M 私も美術館に行くのは、その作品がどういうことを発しているかということを感じたいというのが理由です。それから、そういうことをちゃんと感じられる自分であるかどうかというのを試しに行っていますね。

会場N 美術館では特に常設展示の中に、「若いときはこの絵は余り好きではなかったのが、なぜ50超したらおもしろく見えるんだろう?」って思う作品があったりして、誰もいない常設展示室に行って作品を独占できる楽しみのようなものがありますね。

会場O 同じ時代に呼吸をしている人間として見たいなと思っています。だからこまめにいろいろなところを見て回ったりしているのです。

会場P 私はアートの勉強は全くしてないのですが、昔からなぜか絵を見るのが好きで美術館にはよく行きます。入口では心はゼロの状態だったのが、会場を回っているうちにだんだんボルテージが上がっていくみたいな、うまく言葉にできないけど、ライブとか音楽とかとは違う芸術で気持ちが上がっていく感覚が好きなんです。ときにはゼロのまま出口に出ちゃうときもあってありますが……。

会場Q 学生時代、僕はたくさん展覧会を見ていたと思うんですね。でもそのときは、今考えると頭で展覧会を見ていたような気がするんです。文献読んだりカタログ読んだり、事前の情報でもってそれを確認するために展覧会へ行っていた。外国の美術館へ作品を見に行くときも、義務であったような気がします。ただ、それが決定的に変わったのは、やはり美術館へ勤めてからだと思います。美術館へ勤めると、作品は表面を見るだけではなくて、物として見るんですね。絵にも触りますし、額の裏も見ますし、細かく点検するので筆の跡も見ます。そうすると、そこに無限にいろんなことが含まれているというのがわかるんですね。額の裏に張ってあるシール一つ一つに、その時代のギャラリーの展覧会、そこで作家がどういうふう考えたんだろうかということも考えさせられます。

それから、展示をしているところへ毎日行くんですね、美術館です。同じ作品を何度も見るんですけども、やはりもう見なくていいということはないですね。ふと見たときに新しいものが発見されて、無限にテキストが含まれていると思います。それを知ってしまうと、やはり見に行かざるを得ませんね。人に会うのと同じように、刺激や出会いみたいなものがないと何も始まら

ないと思いますよ。

会場 R 私は最近、特に友達との会話で、「誰某よかったよ」とか「誰某よくなかったよ」という、ある種、展覧会が共通言語みたいになっています。ゲームではないのですけれども、自分の価値観がそれでわかったり、自分が決められないことを他人の価値観を借りて決めるみたいな感じでしょうか。

ちょっと質問してもいいですか？ 最近、私は若いデザイナーとか作家さんとかと話をする機会がすごく多いのですけれども、よく「プロとは〇〇だ」という言葉を聞くのですが、お二人にとってプロとは何ですか？

堂本 私は、自分はずっとアマチュアでいたいんです。プロにはなりたくない。というのは、やはりプロというのは期待されたことができる人、応えられる人であると思うんです。結果的にそうなればいいんだけど、私にとってそれがゴールではないのです。いつも自分のやることに新鮮でありたいし、結果は見えていないものだと思うので。

青木 プロというのは続けていけるということだと思うんですよ。1点だけだったら、どんな人でも絶対にすごいものがつくれると思うんです。だけど、それが自分の生き方であって、ずっと続けていくことができるということがやはりプロだと思います。

会場 S 僕は、基本的には新しい発見があることというのを期待して行って、どんなささいなことでも構わないのですけれども、できれば自分の人生観とか世界観とか、そういうものに若干なりとも影響を与えるようなものであってくれたらいいなと思っています。ただ、今は、見たことを文字にしなければいけない仕事なので、そういう意味では、いつも「どういうふうな言葉にかえられるかな？」というのを考えながら見ざるを得ないのですけれども。

一つお尋ねしたいのですが、すごく具象的な作品だったら見ればわかるということもあると思いますが、とくに最近「この作品って何だろう？」というふうに感じる作品がすごく多いと思うんです。展示スペースにおける「作家の言葉」というのをどんなふうに考えられているのかなど。作品に込めた作家の思いというのが言葉としてあることで、鑑賞者により伝わりやすくなるという可能性もあると思うのですけれども、そのあたりはどんなふうに考えられますか？

堂本 私は基本的には、説明は要らないと思っています。タイトルでヒントを与えることはあるし、むしろタイトルで理解の幅を広げたいという気持ちはあるのですけれども、やはり説明してしまうと、多分それしか見てくれないんじゃないかという不安があるんですよ。何もなしで見た方が経験としては幅があるんじゃないかと思います。かといって、具体的に話をしたいといって来てくださる方とは、ずっと話をしたいし、私の込めた思いみたいなものを話し合っていきます。

青木 以前はタイトルにしばられて見られるのは嫌だったので、タイトルをつけなかったんです。でもだんだん、その「言葉」が私は好きだなと思ってきて、例えば、「玉」とか。その言葉と作品が同じじゃなくても、この「言葉」が好きな私がいて、その私が作品をつくるということでもいいんじゃないかと思うようになって、タイトルをつけているんですよ。だから、そういうふうに聞かれれば、もちろんできるだけ自分の言葉で返したいけれども、言葉で言えるようだったら、きっと彫刻家になってないと思います。

堂本 逆に質問があります。文章にすることをお仕事にしているらしいわけですが、自分が見て感じたことと、それを文章にすることというのは同じなのですか？

会場 S 記事である以上、感想文ではなくて、やはり一定の批評性はどこかに入らねばならないと思います。だから、「言葉に還元するためにどうしたらいいだろうか？」というのをいつも試行錯誤しながらやっています。一番恐れているのは、こっちがその批評性の部分というのを考えているときに、それが作家、つくり手の意図というのと、どんどん乖離してくる可能性というのがあるのかなというところなんです。

青木 それがすごく離れていけば離れているほど、「ああ、なるほどな」と思いますよ。

堂本 書かれた文章はあなたの作品なのですから、個性がそこへ出てきて、それをつくり手が読んで「あ、そういう解釈もあるのか！」という感動もあると思うんです。

例えば今回の私の作品、私にとっては非常に個人的なモチーフ、意味があって描いている絵なんです。命について描いているんだけど、見る人は全然違うと言うんですよ。例えば「母性を感じる」なんて言われちゃったりして。それは、その人が母性についてすごい考えているから、そう感じるんでしょう。やはり作品って、ある意味で鏡なわけよ。もちろん作家が描きたいことがあるんだけど、それはどうでもよくて、実は見る人たちが自分の、こだわりとか考えをその中に映し出して、自分を見ているだけというかね。作品がそれぞれの人たちの鏡になるような表現ができれば、私にとってはラッキー。それがすごく魅力なんですよ。

青木 作家側から見るとどう書かれても間違いは絶対あり得ないので、あなたが思った、感じた、分析したことを書いてもらえばいいんじゃないでしょうか。

会場 S 委ねられるというのはありがたい一方で怖いですよ、逆に。

青木 そうですね。でも、お互いに怖いですから。

会場 T 残念ながらというか喜ばしいことなのかわからないのですけれども、私は美術の関係の仕事をしているので、それが邪魔をして見方ができあがってしまっています。例えば、今回の展覧会は何点出品されていて、どういうキュレーターで、どういうカタログで、どういう作品で、というような、そういう仕事の見方から入っていつてしまう。そうするのが癖になっちゃっているんで、それは自分としてはちょっと残念だなという気持ちがあります。点数をつける的な見方をしちゃうところがあるんです。

ただその反面、個人として見る場合は、お金を払うなり、自分の忙しい時間を割いていくという行為がそこにあって、やはりすごく神聖なことだと私の中では思っているんです。教会に行くみたいに、ある作家が一生懸命真摯につくり上げたところに、自分もそういう気持ちで行くんだという思いがあって、実際そこに行ってみて自分がどうリアクションするかということを確認しに行ってるんじゃないかなど。本当によかったと思っていた作品が、次に見たときには自分の中で何も起こらなかったりとかいうこともすごく多いですし、また逆もある。やはりそのときの自分を映しているものを見に行っていると思います。

司会 長くなりましたが、一通りマイクが回りました。青木さん、堂本さんとも、皆さんのご意見にいろいろ感じられることがたくさんあったようですし、皆さんもお二人のざっくばらんな言葉から新しいものが見えてくるかもしれません。また展覧会を担当している私たちも、これからどういう展覧会を目指していくべきなのかということを考える上で貴重な発言もいただきました。今日は遅くまでありがとうございました。(拍手)